

---

# マイノリティ達の昼下がり

黒澤獄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイノリテイ達の昼下がり

### 【Nコード】

N6588S

### 【作者名】

黒澤獄

### 【あらすじ】

普通って大事ですか？  
皆と一緒にだと安心しますか？  
好きなものを、好きって言ってますか？  
最近人を愛していますか？  
最近怒ったりしませんでしたか？

色々な悩みを抱えたマイノリテイ達は、それでも呼吸して、脈を打ち、仕事をして、時に涙を流しながら必死に生きている。

いつの日か、大声あげて自分を表現できる日を待ち望みながら。

## 序章（前書き）

この小説には、一部ボーイズラブやガールズラブ、いわゆる同性愛の表現が含まれております。

苦手な方はご注意ください。

また、本格的な同性愛小説でもありませんので、悪しからず。

## 序章

夏が過ぎ去り、冬に向かおうとしている今日この頃、やはりまだ外は直射日光によりうだる暑さを保ったままで、それに呼応するように地面もまた太陽のそれと同じうだるような暑さを照り返している。

そんな町中を、上手に日陰を歩きながら芦屋美奈子あしやみなこは目的地を探していた。

「二個目を右……」

四つ折りにされた小さな紙には、自分の感性を盛り込んだポップな図柄もはしゃいでいて、なんだか不思議の森を探索しているようで、他人の目から見ても楽しめそうな代物に仕上がっている。

彼女は今を楽しんでいる、つらいという感覚はないし、ここ数年フラストレーションだとか、ストレスといった言葉ともご無沙汰である。しかし、それは彼女の心が傷ついていないということではない、それなりの酷い恋も体験してきたし、鳩に糞を落とされたこともあった。しかし、彼女はどこか怒るといふ感情が欠如しているように怒ることがないのだ。本人はそれで満足している。

だからこうして、学校の木材を使い過ぎて怒られて、自分で調達して来いと炎天下を歩かされても、新しい発見と興奮が上回り、イライラはそれこそ日照りにやられてノックダウンしていた。

「高倉材木店……高倉……」

都会と言っても、一本脇道に入っただけで印象はガラリと変わる。商店街というほど所狭しと店は建っていないものの、住宅街と言うほど家も建っていない。それぞれが孤立していて、それでいてつながっているような印象だった。

神社から道に伸びた木陰に隠れながら、金物屋さんと、昭和歌謡の大御所さんのプロマイドを売っているよくわからない店を超えた先、少し大きな道と交差しようとする手前に、目的の材木店は建っ

ていた。

地図と周りを確認し、看板の『高倉材木店』を指さし確認して、まずは店の横に陣取る。

そーっと、中を覗くようにして少しずつ近づく、窓から中が見えたのでこっそりと覗いてみると、部屋の中央に作業用の大きな台があり、その上に板、その上に仰向けに寝そべり頭にタオルを巻いた人がいて、携帯をチエックしていた。

覗いていると目の前から若い男性が迫ってきて、少し気まずくなつて覗くのをやめる。

そして美奈子は、意を決して声をかけてみた。

「あのー……」

男は携帯を打つ指を止め、仰向けの状態のまま、頭だけを反らし目を合わせた。

「高倉真たかくらしんさんですよ？ 大塚美術大学から来ました芦屋です。よろしくおねがいします！！」

「あつ、ああ！！ 今日だったか、ちよつ……どわっ！！」

熱い。あまりにも熱い。

出不精な彼、佐藤孝幸さとうたかゆきが、会社以外で外に出るのには理由がある。

とある雑誌の発売日が、その出る日なのだが、あえて通販に頼らない理由は下世話な話で、店員さんがタイプだからである。

孝幸は日陰に入る努力もせず、ただただ歩道を作業のように歩いていく。そんな彼の目に留まったのは一人の女性である。

特に見どころもないような街で、女性が覗くほどの店があったかと考えるが見当たらない。ファッション専門店も、お洒落なカフェも無い。

女性は孝幸が視線を向けていることに気が付くと、バツが悪そうな表情で覗くのを止め、その建物の中へと足を進めた。

近い距離まで来て、彼女が小さく震えたような声で自己紹介しているところを見ると、悪い人ではなさそうだし、なんらかの関係者であろうとも推測できる。

（高倉材木店……若い女性が休日返上で来るようにも思えないな）  
そんなことを思っただけで横切ると、緊張した女性を見つめながら、ラフな格好に頭にタオルを巻いた男が、寝そべった状態から必死で起き上がるようにしていた。

視線を前に戻し、目的地へと思考を切り替える前に大きな音が響いた。落ちたらしい。

彼が向かっているのは本屋ではない。それは彼の性的志向が向く先が、少しだけ周りと違うことに関係する。

大通りに出るか出ないかのところ、ボロボロの建物の一階、長い暖簾をくぐった先は、一般人が見たら反応に困る花畑が広がっていた。

ド派手な下着、大人の玩具、そういった雑誌にそういったDVD、カウンターにはいつもの……。

「あれ？ 誰？」

「あ、常連さん？ 祐樹なら休みだよ。俺は代理店番の花村ですよ。よろしく」

そういつて椅子から立ち上がりながら、カウンター越しに握手を交わした。

「花村さんも、そっちの人？」

「ああ、俺はバイだよ」

「そうなんですか……」

もともと対人関係も苦手な孝幸は、それ以上彼に踏み込めなかった。バイということは、可能性がつぶれたわけではなかったが、ドギマギして上手く言葉が紡げなかった。

いつも孝幸は考えていたのだ、僕を無条件で愛してくれる、四十以上の紳士で、背が高くて、熊みたいにヒゲ生やしてて、デブでもガリガリでもないような人が、目の前に都合よくあらわれてくれな

いかなど。

最初の一つ以外をクリアしているのだ。つまり、花村は孝幸の夕イブだった。

「はい、二百円のお返しです。ありがとうございます」

また来ますも何も言えないまま、外に出て少し後悔。空気を大きく吸い込んで、大きくため息を吐いて、帰宅。

見てしまった。高村花は、この世の心理に近づいたような顔になっていただろう、信号はとくに青なのにもかかわらず、一歩が踏み出せなかった。彼女の性格上、顔はまったくの動揺を見せなかったためか、横を通っていく人からいぶかしげな眼で見られてしまった。

彼女は三十路を手前にしたキャリアウーマンで、職場では仕事ができる怖い上司として、彼女の所属する部署以外でも人気というか、悪名高いというか、有名である。

そんな彼女が職場の仲間、同僚、上司に部下、気を置けない友人以外に隠しているとある趣味があった。それこそ、ここで彼女を棒立ちにさせてしまう要因である。

彼女の趣味、それは彼女を世間でなんと呼ぶかですぐわかることだ。

### 【腐女子】

いったいどこからきたのか、彼女自身はあまりこだわらない。自分を象徴するのに都合のいい言葉があったというだけのこと。

それゆえか、彼女は男がある意味では趣味という形になっているがため、恋愛対象に見れなくなってしまったのである。

そして今、前よりリサーチしていた県内唯一のゲイショップから、一人の男の子が出てきたのだ。周りにその存在を知る者はおらず、知っていたとしても同業者。彼は大きくため息を吐いている。どう



したのかと気になったが、すぐに角を曲がって行ってしまい、視界から消えた。

その少年が堰になっていたかのように、彼女の足は自然と動き出すものの、すでに赤信号へと変わっていた。

表情一つかえないものの、内心初めて確実なゲイを目の当たりにして踊り出したい気分である。

そんな感情を抑えつつ、信号を渡り、いつものコンビニへと足を運ぶ。

「花さん！！」

背筋がビクツとした。嫌いな感触、たぶんアイツだ。

「お疲れ様です花さん、今日は何する予定ですか？」

「アンタに関係無いだろ」

「それもそうですね、ハハハッ！！」

背は百八十あるとかなないとか、柔道で国体に出たとか出ないとか、ヤクザを十人まとめたのしたとかのさなかったとか、まあ、そんな武勇伝まがいな噂が飛び交うコイツは猪頭辰之助<sup>いのがしむしうすけ</sup>。花の部署の部長である。

偶然にも家が近く、よくゴミ出しで顔を合わせるし、近所のコンビニもこの一件でよく顔を合わせる。

しかし、花は彼が嫌いだった。暑苦しくて、ゴツくて、粗暴だからだ。彼女自身クールというか、静かな場所や、静かな時間が好きな人間だったので、一々関わってくるウザい上司としか思っていなかった。

「なにか奢りましようか？ コンビニでアレですけど」  
「結構です」

少し強く言いすぎたか、何かに気づいたような顔をして頭をかき、苦笑いを浮かべて店内に入っていく。

自分も中に入りたかったが、なんとなく居心地が悪かったので外で煙草を吸うことにした。

火をつけたところで、初老の男とその娘だろうか二人組が出てき

た。それをとやかく言うような僻みつたらしいほど家族に飢えてはいないが、男の視線とかすかに聞こえた言葉が、どうも腹がたった。「女だつて煙草ぐらい吸うつうのー!!」

珍しく怒ってしまい、アイツに見られてないか店内を覗くと目が合ってしまった。最悪だ。

最近の若者はなつとらん。口癖のように、一日最低でも一回は口にする言葉だつた。

佐藤幸一は泣く子も黙る大塚東高校の生徒主任で、規律を守り、人情に厚い、昔堅気の人物だつた。

彼には許せないものがたくさんあつた。染められた髪、顔を隠さなばかりのメイク、音を立てるほどの多すぎる装飾、胸元の開いた服、背中が丸見えな服、ミニスカート、女性がするタトウ、女性がする煙草、ありとあらゆる“今時フツーっしょ?”が嫌いだつた。

「先生はいつもここでご飯を？」

「いや、いつもは妻が作ってくれる。休みの日は俺が自腹切つてるだけだ」

隣でおにぎりをどねにしようか悩んでいる少女は鈴木美郷、幸一の元教え子で、今年大学一年生である。

美郷は幸一を慕っており、こうして卒業した後も学校に顔を出したり、行事の補助をやったりしていた。夏には部活のマナージャーのようなものもしており、幸一もまた美郷のことを、最近にしてはいい若者だと、自分の教育に間違い無かつたと思わせてくれる存在である。

休日の今日も、学校の管理当番だつた幸一に、美郷が付き合つた型である。

「貸しなさい、今日は俺の奢りだ」

「大丈夫です。ちゃんとバイトもしてますから」

「女性が体を張るものじゃない、バイトのことはいいとして、男として払わないわけにはいかないからな」

そう言つて幸一は、自分の蕎麦の上に彼女のおにぎりを乗せレジに向かった。

本当は怒つてやりたかつた、美郷にはない、幸一は目の前のやる気のない茶髪の女性店員に一喝を入れてやりたい気持ちをグツと堪えた。

これは、彼女の前だからとかではなく、彼の経験論からだつた。

会計を済ませ、外に出た途端に、外気の照りつける暑さよりも、煙草を吸っている女性が気になつて仕方が無かつた。だからつい言葉が喉を突いて出てしまつた。

「女のくせに、煙草など吸いやがつて……」

彼はこう言う人間だつた。彼の中には普通があつて、それに逸脱するものは異常である。彼は普通が好きだつた。昔からではない、彼にも彼なりの歴史があつたことだつた。

それでも美郷は軽蔑もせず『先生の言うことも一理あるから』と言つて、変わらぬ笑顔を見せてくれる。

そんな普通を愛する彼には一つ、どうしても気がかりなことがあつた。

昨今も同業者の仕業であろう、否、彼自身はソイツらを同業者と呼びたくはないほど、卑劣で、不埒で、卑下するに値する行動であるからだ。

そう、彼はいわゆるロリコンであり、若い女性が大好きだつた。

しかし、彼の心情たる普通を逸脱する思考だと、自分自身を戒めて生きてきた。そんな彼はある意味で、美郷からの信頼の念が辛かつた。

美郷は幸一の中で忘れられない存在になろうとしていたからである。

【マイノリティ達の昼下がり】

## 第一章・一話

すぐ片づけられるからと言って三十分、一行に片付いていないと思うのは夏の暑さによる厳格ではなく、もともと掃除が苦手な高倉真のせいである。

美奈子はとりあえずと案内された部屋の隅で、その光景を見つめるだけであった。

素人、いや、業務にかかわっていない人全てが、どれが必要なものでどれが不必要なものかは皆目見当がつかない。大きさがまばらな材木達が、奇麗に資格を保ってたてかけられてるだけで、それが少しずつではあるが、必要と不必要にわけられていく。その光景を見ているだけで、なんだか美奈子は楽しくなってきた。

「あ、ごめんごめんお茶とが出すべきだったね」

「いえ、こつちが無理言つて押しかけたようなものですから、お構いなく」

そうですかと真は作業に戻るとしたとき、思い出したかのように材木の束を運んできた。

「こんなもんでいいんですか？ 俺が提供できる廃材ってのは、加工失敗したやつだけで、丸太みたいなのは無理だけど……」

「いえいえ、十分です。ありがとうございます」

そう言つて美奈子は自分のカバンから彫刻に使う道具を引っ張り出し、あてがわれた机に並べ、材木を選ぶ。それを見て真は作業に戻る。

更に三十分ほどして、真はようやく片付けを終えることが出来た。と言つても、必要と不必要に分類しただけで、乱雑に変わりはない。乱雑に変わりはなかった。

人のしていることが気になる真は、よく電車で新聞を覗いたり、携帯を覗いたりしてしまふ。

一言言えはいいのに、真はそつと美奈子の背後に近寄り、作業を

見学する。

下書きも無しに、いとも簡単に掘り進め、人の顔の形を作り上げていく。

粘土やパイに顔を押しつけてできるような窪み程度の作品ではなく、まるで何か一枚のガラスを通して向こう側に、浮き出ている絵があるかのような繊細さ、細かくやすりで削っては、荒々しさの中に細やかな曲線を作っている。

「あ、」

「わっ！！」

声を漏らしてしまい、手を滑らせ、美奈子は左手の人差し指を少し切ってしまう。

美奈子にとっては慣れてしまったもので、別段慌てるものではないのだが、原因を作ってしまった真は気がでない。わーわー騒いで救急箱を探し、水道はこっちで、タオルがこれだと半ばはしゃいでいるようにも思える。

ようやく見つかった救急箱から、消毒と絆創膏を取り出し、優しく看病する。

「大丈夫、痛くない？」

「はい、平気です。いつものことですから」

不器用な手つきで絆創膏を貼り終え、真は何度も謝った。美奈子は傷が浅かったためか、あまり怒ってはいなかった。むしろこのあくシデントで、距離が縮まって、居心地が良くなったと笑って話した。

そして、気づいたように先ほどまで作業をしていた板を一枚持ってきて、真の目の前に突き出した。

「じゃーん」

「ん？」

「わかりませんか？」

板の横から顔を覗かせ、美奈子は疑問符を浮かべる。

同時に真も真剣に悩みだしたが、結局答えは出なかった。

「降参、正解は？」

「ん〜、似てないかー難しいな。正解は真さんでした」

「えー！！俺？美化しすぎじゃない？」

「そうかな？」

言われて悪い気はしない。むしろ嬉しいくらいだ。真は内心ホツとしたのが半分と、嬉しさが半分ずつ介在していた。

「一応、お世話になるってことで、プレゼントです」

「えっ、マジ！？ありがとう」

その後というものの、意気投合してしまい、真の仕事の話、美奈子の学校の話と、自分の身の上を語り出してしまった。

真の材木店はフルオーダー制で、一般客や、起業の立案の際に用いられたりする。友達のデザイナーを呼び、お客さんや企業の形を図にしてまとめて、後は真が一人で仕上げるといった形だ。

一点もので、特別な木を使ったりするため、一件の受注で結構儲かる。

更には、フルオーダーが苦手、案が浮かばない人のために、手作り感を演出することを目的とした組み立て式の椅子やテーブル、棚などをこしらえることもある。

ちなみに、ホームページのデザインも友達任せである。

美奈子の方と言うと、奔放な発想と、作るまでの時間、完成度の高さから将来を期待されたものの、調子にのって次々に大きな作品を作って行き、学校側の経営をひっ迫させていたようで、自ら材木店に頼みこんで、作品を作らせてもらいにきたとのことだった。

「あ、もうこんな時間、今日何もしてない」

「ほんとだ、俺も何もしてないな」

少しの間があり、そして二人を同時に口を開く。

「明日が忙しそうだ……」

二人は顔を見合わせ笑い合った。美奈子はわざと恭しく改めて挨拶をして、帰って行った。

真はというと、受注のメールを確認しながら、なんだかすこし空

虚な気持ちになっていた。



## 第一章・二話

「で、どこらへんが駄目なのよ？ ガッツリのろけ話聞かされてる気分なんですけど」

美奈子の通う大学の学食で、友人の五十嵐和美いからしかずみは少し不満を口にする。しかし、その矛先は無残に曲がっていて、強く当たる気にならない。

なのでとりあえず、もう一度同じ質問を繰り返してみる。

「で、どこらへんが駄目のなの？」

そもそも落ち込んでいる美奈子に、和美が声をかけたことが事の発端で、恋多き初心な女性美奈子がまた、春の訪れを勘違いしているのではないだろうかと心配になり声をかけたしだいである。

しかし、口から出るのは男のいい点ばかり、恋は盲目とは、このことを言うのかと、少し飽きれていたところ、ようやく美奈子の口が開いた。

「ゲイなの……」

「あちゃー……」

意外と大きな壁にぶち当たった様子で、和美も言葉を失った。

「ナニナニ？ 今ゲイって聞こえたんだけど」

意気揚々と現れたのは二人の友達の藤坂潤とうさかじゅん、世に言う腐女子という人種で、美大なんだからエロゴリ紳士のヌードモデルが来ないかと、少しの矛盾を孕ませながら日々を送っている。

趣旨を全く理解していない潤に、美奈子が順を追って説明すると、次第に潤の顔に真剣さが出てくる。

が、口から出てきたのは叱責の声だった。

「ばっかじゃないの」

疑問符も、威圧するほどの声量もなく、ただつぶやくように罵倒され、ふたりは困惑していた。

「なんて言うか、時代錯誤の夢見る乙女ボジでも狙ってるの？ そ

れ」

「結論から言え」

和美が強めに食いつくと、潤は笑顔をつくりつつ額に汗をかき、両手をブンブン振り回して拒絶を表す。

「だから、そいつはゲイじゃなくてただの腐男子だって」

当然のように二人はきよとん顔で、今だに結論を行った事に気付いているのかすらはなはだ疑問である。

もとはと言うと、材木店に通うようになり、当然二人は日ごとに会話を交わしていく。自分の趣味や休日の過ごし方、あの友達がどうで、この友達があだとか、エトセトラ。

そうして少しずつ交流を増やしていくにつれ、人生経験すら少ない美奈子は次第に魅かれて行ったのだが、相手はそんなこと露ともしらなかつた。

そして、趣味の話で盛り上がっている時、少し二人の壁が薄らいだのだから真から思わぬ言葉を聞いたのだ。

「いやあ、それにしても平成STEP！！ の吉永君ってカワイイよなあ」

平成STEP！！ とは、アイドルグループを多く排出する大物プロデューサージョニーが抱える今一押しユニットで、メンバーの全員が平成生まれ、中には中学生も含まれている。

真が語った吉永君とは、ドラマにも出演したり、平成STEP！！ 結成前から人気の高いアイドルで、まだ高校一年生だったと、美奈子は頭の中で思い返していた。

それよりも気になったのが、カワイイと言う言葉だった。それがどうも引つかかってしまったのだが、どう質問していいかもわからなかつた。

「それで、好きすぎるから前友達からポスター貰っちゃてさ、見る？ 超カワイイよ」

「いいです」

その時たぶん、美奈子は自覚していないが、ここぞとばかりに冷めた声で対応していたらと思う。

「いい、平等がうたわれてようと、同性愛者はそれなりの対応とリアクションを他からつける、いわば他人にオープンになれるやつはそうそういないものよ」

「つまり、趣味のいつかんであり、恋愛対象でないから口にしたらけど？」

「そう。だから、美奈子は気にしちゃ駄目よ」

だからと言って、はいそうですかと簡単に解決できる話では無かった。疑いが晴れても、美奈子の心の中にしこりは残る。

お昼が終わりそうな頃、三人で話しているところを同じゼミの男の子に声をかけられた。飲み会のお誘いだ。

美奈子が恋多き人間と友達から思われているのは、同じゼミの錦山宗田きやまそうたに一目ぼれをしたところから始まる。つまりは、一目ぼれ体質なのだ。

告白するにいたらないまでも、脳内は确实メルヘン使用である美奈子を、ほかは面白がって見ている。応援はしない。本人のためにならないからと、人生の先輩達、和美や潤は否定もしないでゆっくりと見守っている。

かくいう錦山という青年は、今どきの草食系男子に分類されるでもなく、肉食系のチャラ男にも分類されない。とりあえずあたりさわりのないいい人なのが問題で、美奈子は優しくされるたびに勘違いを起こす。

三人ともが参加の意を伝えると、美奈子が口を開こうとした。言わんとすることは予想がつくので、和美と潤はそれを一言で押さえつける。

「違う」

## 第一章・三話

朝、美奈子と真は作業場に集まると作戦会議をするようになった。自分に想像力が無いことから、何か売れるいいアイデアはないかと美奈子に聞いたり、逆に美奈子から客観的な意見を求められたりと、持ちつ持たれつの関係である。

そして今日、二人で決めた期限の日、二人は互いの作品を持ち寄って、お披露目会である。

「中々……いや、だいぶ凄いいんじゃないか」

「そうですね……、卒業制作とかこれでいいですよね」

二人は互いの作品を見ながら、恐る恐る言葉を紡ぐ、自分からすれば間違いなく最高傑作であると同時に、相手もそれを認めてくれる気がするのだ。

美奈子の作品は、白っぽい板と黒っぽい板で描いた織姫と彦星。白に織姫を、黒に彦星を掘り、ふたつを並べれば二人は会えて、ふたつを重ねれば会えないという物語を内包した作品である。

真は、新しく店の看板商品になるようなものを探していて、機能美は大手メーカーに勝てないことは重々承知、勝てる見込みと言えれば、木本来のぬくもりや、しなやかさ。そこから連想させられるな面的な癒しである。

それを最大限に生かすために、椅子をつなげられる使用にした。近くにある金物屋さん頼んで椅子の下部に金具を設置。誰でも簡単につなげられて、背には抽象画をあしらった模様を施し、つなげても楽しめる作品にしてみた。

更に、夫婦椅子としてだけでなく、赤ちゃんが生まれたように、さらに真中に挟むと違う絵になるように施してみた。

「あ、すいません。今日合コンなんで」

「いいなあ〜大学生いいなあ〜」

ダダをこねて俺も行きたいアピールをするが、さすがに困るので

無視を決め込む。

真もやはり大人であり、美奈子が行ってきますと言えば行つてらっしゃいと返した。

美奈子はどうもあういう場所が苦手であつた。刹那的なその全貌が目まぐるしいのもあつたが、どこか無粋である氣もした。

他の友達は順調にお相手を探してる様子だが、美奈子はそうもいかず酒を飲んでごまかす。

どうにか帰れないかなと美奈子が算段していると、錦山が大声で場を制した。

「ゴメン。俺課題で忙しいから、これで帰ります」

そこら中からヤジが飛び、ブーイングの嵐だが、冗談とわかつている。困り顔で人の波をかきわけける。

「あ、私もそろそろ帰ります」

ここぞとばかりに美奈子も手を上げ、別れを告げる。今度は錦山と違って、感違いな歓声も上がる。少し申し訳ないと思つた。

「それ、今度学校主催の個展で出す作品？」

「そうそう、現代版和洋折衷阿修羅像」

本来はブラフマーが居るはずのヴィシュヌ又神の蓮の上をモチーフとした、ドーリヤ式の台座の上に、荒野のガンマン顔負けな重装備をした阿修羅像。

「きよとん顔してるけど、美奈子ちゃんが前学際で作つた、日本版ラオコーンも中々の破たんぶりだつたよ」

美奈子を作つたのは、ラオコーンをモチーフとしつつ、ラオコーンを建速須佐之男命、海蛇を八俣遠呂智、そしてラオコーンの二人の息子が伊邪那岐命と伊邪那美命。

完璧なまでの設定を無視した作りであるが、多神教ということも

あり、熱狂的な信者もおらず、あまり問題にはならなかった。

「それにしても、わざわざ雨叢雲剣あまのむすぶを警備員けいびいんに持たせたのは正解だったな」

そんな取り留めのない話をしていて、美奈子は気がついた。

錦山の作業をさつきから見ているものの、笑顔が見られない。真剣な表情はどこもおかしくないのだが、疑問符を持ってしまふ。

「ねえ」

「ん？」

「錦山君って恋したことある？」

「そりゃ、何度かは……」

「それってどんな気分？」

「ん、モヤモヤして、胸はバクバク、苦しくてどうにかしたくてもどかしくて、でも……」

「でも？」

「すっげー楽しいし、幸せなんだよ」

「じゃあ今は？」

「今？ いや、ただがむしゃらに……必死に作業してる感じかな？」

一呼吸置いて、自分の中で整理をする。

「そっか、私行くところ出来たから」

錦山が声をかける前に駆け出していた。意図がつかめない会話だったが、錦山は少し後悔もしていた。

そして同時に、彼女の忘れものに気づき、中身をちらつと確認してみる。

「板？ あー、作品か……」

良心はとがめるものの、戻ってこないことを確認すると、カバーを外して作品を見る。

「恋ねえ……駄目だ、勝てないなアイツには」

さつきまで必死に、がむしゃらに取りかかっていた作業を再開するものの、気持ちは全く違うものになっていた。

笑みを浮かべて、少しでも近づけるようにと、槌を振る。

星が綺麗な夜だった。ほんのりと湿った風が気持ちいい夜だった。美奈子は少し浮かれながら足を急がせ、まだ起きてるかなと、真の材木店を目指す。

灯りはまだついていて、外から覗くと最初に会った時のように、大きな板の上で図面とにらめっこしていた。

「あれ？ 忘れ物？」

美奈子は自分で自分を解決できた。たぶんきつと、恋に恋をしていたと。

だからって自分がピエロってわけじゃない。はっきりとした意思のもと、自分と言う人間は恋してる人間が好きであると結論もつけた。

「まだ作業してるかなって、なんか手伝いますか？」

だから、恋多き男性のもとにもう少しだけ一緒に、もっと一緒にいたかった。

終わりが来ても、終わらせないように、美奈子は祈りにも似た自分をただ、このしがない材木店に捧げる思いだけだった。

一章完

## 第二章・一話（前書き）

二章ではボーイズラブ、メンズラブといった表現が含まれます。苦  
手な方はお戻りください。



## 第二章・一話

美大を出たものの、絵や彫刻で食っていけるほどの実力も実績も無いまま、出版社のとある雑誌のレイアウトやら構成を任せられる、少し有意味な、それでいて不満もない仕事につけて、まだまだ新人の俺は会議にとりあえず出席するだけのパシリ。なんだかんだで三年が経つ。

そんなある日、隣の部署の高村花たかむらのはなという女性から呼び出しを食らった。

内容はかるいもので、同じ大学のOBだということを聞きつけて、今度ある学生作品を集めた個展に行かないかと誘われた。

ゲイである自分からすれば、見ず知らずの女性と休日を共にするのは少し気が引けたのだが、対して予定もなく、人の申し出をむげに断ることのできない僕は、安請け合いしてしまう。

僕はこの性格を半ば呪っていたが、今では全く逆の感情を抱く。運命の相手と再会したからだ。

「あつ」

素っ頓狂な声を出して二人は互いを見る。先日ゲイショップで店主の変わりで店番をしていた人だと、僕は一瞬でわかった。相手も覚えがあるような無いような、もうしわけないような表情で名前を聞かれた。

「佐藤孝幸です。前、あの……お店で会って……」

「ああ!!」

思い出したように指をさして頭を上下に振る。

花村尚也はなむらなおよ四十二歳、定職には就いていない自由業、大学で非常勤講師をしたり、道端で似顔絵描いたり、絵画教室を開いたり、マンガのアシスタントに駆り出されたり、法廷画家までやったことがあるそうだ。

彼が教えてる大学が大塚美術大学で、その卒業生だということこ

るから会話の糸口を見つけ、どうにか話を盛り上げる。

花はというと、二人を見るや否や、少し焦ったような表情で別行動を言明し、どこかへ行ってしまった。

僕はと言うと、ここぞとばかりに焦っている。変な汗が背中を伝い、口の中はカラカラだった。

「にしても、今年の子は凄いな、頭のいいバカがいっぱいいるね」  
そう言っただけで無邪気に笑う顔が好きだった。不精髭を撫でつけ、真剣に細部までをも丹念に見る目つきが好きだった。

視線に気づかれなかつたかと内申ドギマギして、始終行動に一貫性が無い様子をさらけ出し、アタフタしてしまつた。早く次の言葉が投げかけられないか、受身の姿勢も変わらない。

「特にこれ、織姫と彦星の作品、一緒になれば離れて、ふたつに分けると会えるなんて、とっても意地悪だけどロマンチックだよな」  
彫刻のことなんてわからなくて、月並みな言葉が口について足早に出て行く。

「ねえ、お腹すかない？」

時間は午後二時、昼に花と待ち合わせ、食事もとっていないなかつたため、当然お腹はすいていたし、何より花村さんからの誘いを断るなんて無粋なこともできず、ふたつ返事で了承を示す。

花とは別にデートでもなんでもなかつたため、一言挨拶に行くと後輩と盛り上がり上がっている様子で、後腐れなく別れを告げることが出来た。

そこからはもう雪崩のような一日だった。

自分がゲイだと自覚して日は浅くないが、肉体の経験は少なく、月に数回行くゲイバーでも、相手を探すよりママとの会話の方が盛りあがってしまうため、相手もあいにくいなかった。

花村さんと食事をとった後、部屋にこないかと誘われ、内心心臓が飛び出さんばかりだった。

相手は自分がゲイだと知っているし、相手もバイで可能性が無い

わけではない。

ところがこうも上手くことが運ぶことなんてあるのだろうか、全  
てが終わった後、ベッドの上にいる今その時も疑ってしまっ。

僕はようやく、運命の相手と出会った。

## 第二章・二話

何度逢瀬を重ねただろうか、僕にとって最良で、最高の日々が毎日のようにやってきた。

会えた日の喜びも、会えない日のもどかしさも、すべてのものが愛おしく、その手に、その肌に、その熱に触れていたかった。できればずっと。

互いの部屋を行き来し、食事当番はもっぱら僕で、彼は楽しそうにお酒を飲んでいた。彼が喜んだ姿が見たいからなんて、相手を甘やかしているようにも見えるが、彼もれっきとした大人だから、そのあたりの関係は十分に理解していると思う。

とある日、彼が用事で会えない日、僕は久しぶりに行きつけのゲイバーでママに幸せを報告してやろうと、半ば嫌味交じりの気分で、足は浮かれ気分でそこへと向かう。

今日はあまり繁盛していない、常連客が二人だけ。僕は無難に挨拶しつつもの席に座る。

鼻歌交じりとまではいかないが、顔は幸せをかたどっているようで、ママからは一目瞭然で少し嫌な顔をされた。

「いいことありましたよって、これ見よがしな顔ね」

「わかる？」

僕は事の次第をママに話した。

単なるノロケ話なのだが、その一線を越えれば見事な運命的な出会いの話、嫉妬の念も無くなって、皆は興味津々に僕たちの物語を聞いてくれた。

今日は俺のおごりだなんて言うておきながら、ビールの一杯だけをみんなにふるまい浮かれ気分。

できるなら毎日でも会いたい。毎日でも体を重ねたかった。それは若さゆえの衝動ではなく、確かに感じる愛の形を見失いたくなかったからだ。

でも、人生つてやつはそんなにうまくいかない。僕がうまくいついてても、必ず誰かが、外から、壊しにやってくるのだ。

「空いてる？」

聞き覚えのある声、今日は確か仕事が忙しいとのことだったのでそうでは無いとわかっていても、体は自然と声のする入口の方へと向く。

そこには俺と同一年くらいの男を連れ、尚也の姿が見えた。

完全に目が合った。あっちもどうしたらいいかオロオロしていたが、連れの若い男に引つ張られ店内へ、俺はというと、その空間に状況に耐えることもできず、適当に金を財布から取り出しカウンタ―に叩きつけるようにしておいて、店を出る。

その日家に帰る間も、次の日起きた時も、電話は遠慮しがちに、それでいてさびしそうに鳴っていた。

表示される彼の名前に複雑な気持ちになりながらも、とりあえず会社に向かう。

オートロックのマンションを出た道に向かい側、不安そうに携帯を握りしめた尚也の姿があった。

急に現れたためか慌てふためいていて、僕はというと、言葉を聞くことすら怖くなって、逃げだすように歩きだした。

「孝幸待つて！！」

必至そうな声に足を止める。

「その……昨日は、ゴメン。もうアイツとは会わないから、その……ゆるしてくれないか？」

震えた声は、誰よりもよわよわしく思えた。被害者である僕以上に、真に迫るものを感じた。

しかし、それは勘違いだったのだろうか、一回目僕は素直に尚也を許した。

また二人は仲好く毎日を送るが、たまに尚也は浮気をする。

僕が見つけることもあれば、ゲイバーのママからの情報もあった。バイだからしかたないと言ってはどうしようもないが、女性と浮

気をした時は本気で別れようと思ったのだが『二度としない』『絶対しない』『金輪際しない』『一生のお願い』、もう言っていない言葉が無いくらいに、彼は俺に謝罪を繰り返す毎日を過ごしていた。そして僕も、それを許してしまう毎日を、ボロボロになりながらも過ごしていた。

「これで何回目？」

「えっと……八回目かな？」

「八回目かな、じゃないでしょ、もういつそ別れちゃいなさいよ」「彼だつて反省してるし……」

「してたら八回も浮気しないわよ、しかも今度は女だつて言つじやない」

「料理できる人に弱いから」

「冷静に分析してんじやないの」

毎度いただくきついお叱り。それでも僕は彼を忘れられないし、絶対に戻ってくるから安心しきっている。

どれだけ浮気しても、必ず最後には僕のもとにやってきて、謝つて解決。

それでいいと思っているし、問題ないとも思っている。

でも、周りをそれを心配しているし、別れを進める。別れられないというと、頭を抱えて溜息を洩らす。そんなに酷い状況なのだろうか、僕は自身のことすらよくわからなくなっていた。

九回目の浮気が終わり、またしても元の鞘に収まり、心配をしてくれた周りの友達に報告がてらバーに向かう。

みんなはそれでも深刻そうに頭を抱え、そして僕に呪いをかけた。「十回目の浮気がわかったら、許すにしても冷たい態度をとりなさい。いつかい悪いつて思い知らせないと、いずれ捨てられるわよ」

## 第二章・三話

どうやら自分が考えていた幸せは、ただの妄想にすぎなかったみたいだ。実際に僕が直面しているこの生活は、決して最高にハッピーだと満面の笑みで言うことができない。

理由は彼にある。と、仲間は口をそろえて言う。僕が何かをしたわけじゃないが、当事者としては、こちらに非があるのではないかと考えてしまう。

そして仲間は解決策を考えてくれた。

ピンポイント、間の抜けたチャイムが聞こえた。そろそろ来るころだろうとふんでいたが、いざ本番となると緊張は高まる。作戦はいたって簡単。俺が彼に冷たくすればいいだけだった。

チャイムを一つ鳴らして、彼はドアを開ける。しかし、いつもはかけていないはずのチェーンが彼を遮る。

「おい考幸ー、チェーン外してくれー」

無視はいけない。話して話して、結論で彼が反省するように、冷たくあしらう。

「何？ なにか用？」

「なにかって、俺とお前の仲だろ」

開けてくれと言っていたものの、僕の態度を見て攻め方を変える。自分でチェーンを外し、とりあえず中に入って自分のペースに持っていくつもりだった。

だが今日の僕は違う、間髪入れずに言葉を吐く。

「愚痴なら聞かない。帰ってくれない？」

驚きを隠せない様子、どうやらこっちのペースに持って行けたようだ。しかし、力づくで外に出せないことは百も承知だから、さらに毒を吐くしかない。

しかし、言葉を多用しては雰囲気つぶち壊しである。基本受身の体勢で、空気を悪くする。

「あのー、怒ってます？」

「だったら？」

いつものが来た。怒っているとわかると、一生のお願いだとか、二度とやらないとか、お前が一番大事だ、だとか、言葉巧みに毎度文句を変えて、頭を下げるのだ。

「頭下げなくていいから、とりあえず帰って」

理不尽だと自分できづいているのか、さも怒りたいのは自分だと言わんばかりに目をこわばらせ、鋭く睨んでくる。

しかし、彼はただ、自分のしたことに對し、主観に立てていないだけだった。

「こっちは遊んでやった女に五股もかけられてな、遊びだったのか言われたんだぞ、傷ついて……」

墓穴を掘ってる事によく気付いた。自分の毒で致死寸前だともうやく気付いた。

僕は最後の一撃として、大きいため息を吐いてやった。

謝罪の言葉も、姿勢も、反撃の言葉も、理由も出尽くした彼は、戸惑いをあらわにしていた。

今までもこうやって、遊ぶだけの人生を送ってきたのだろうか、思えばこのとして奥さんがいないのはそういうことなのかもしれない。

僕はそんな彼を見て、どうしようもない気持ちになった。どうしようか、自分もうるたえてしまおう。

彼が反省して、僕のもとに戻ってくるならそれでいいのだが、このまま自堕落に一人で一生酒をありながら生きていく選択肢を選んだら、そう思うと心が揺らぐ。

徹底した否定は、僕にはできなかった。

「で、どうしたいの？」

驚きのあまり口が半開きなのが、不覚にもかわいいと思ってしまったが、彼は深く思いつめる。

「許されたい」



「そう……おやすみ」

俺はもうその場にいられなかった。自分でまいた毒にやられ、その空気の中にいれば涙を流してしまいそうになる。

俺は逃げるように、寝室へと入り鍵を閉める。安堵のあまり深く呼吸を三回、気持ちを落ち着かせるために、ベッドにバイオレンスをぶつける。

いつの間にか眠っていた。寝室のドアを開けるのが怖くなった。昨日の一件を思い出したからだ。

それでも僕は立ち向かうように、勢いよく扉を開ける。すると、耳をつんざく、何かが割れる音が聞こえた。

キッチンにはYシャツの袖をまくり、あわまみれで慌てふためく彼の姿があった。

お風呂場からは水の音がする。規定量までお湯が溜まった合図が、けたたまし音と共に知らせられる。

一度割れた皿を置いたままにして、足早に風呂に向かおうとするおころで目が合う。

「……おはよ」

「おはよう」

ぎこちない挨拶を交わして一瞬後、思い出したかのように走り出す。

僕は笑いをこらえることに必死だった。

しょうがないなと一つ笑みを浮かべ、割れた皿を片づける。

「あのさ……」

尻すぼみな声が聞こえた。僕が振り返ると、ばつがわるそうな顔をして、彼が僕の眼をじっと見つめる。

「その……これで許してとは言わないから、少しずつ幸せにしてくから……だから、その……もう一度愛してほしい」

僕は途中から顔が見れなくなってしまった。皿を片づけるふりをして、顔を隠した。

熱烈な愛のサインに涙が？ いやいや違う。笑いが止まらないのだ。

口の端から、鼻からも漏れだしたかすかな気泡が気になって、彼は少し戸惑うが、僕はすぐに限界を迎えて笑ってしまう。彼は素っ頓狂な顔をしていた。

「もう一度愛してほしい……はははっははっは！！」

「わ、笑うこと無いだろ」

少し怒ったような顔に飛びついて、久々にキスをしてやると、少しだけ世界の時間が止まった。少なくとも僕たちの中では。

「おかえり」

「ただいま」

### 第三章・一話

好きと嫌いの境界線があやふやになり始めたのはいつだろうか、たぶん二次元の恋に恋してる、妄想腐女子になってしまったことが原因だと思われる。

一般の人間に求めることをやめて、許容値を大幅に広げて、自分をごまかした。

だから、人に怒りを覚えたのは本当に久しぶりだった。

「え、花さんと部長は同じ年じゃないですよ」

暇な時間に会社の後輩とおしゃべりしていると、思わぬところで思わぬものを拾い上げてしまった。

我が部の部長はだらしないというか適当というか、とにかく風変わり。親の七光で部長の座につき、とりあえず仕事を片づけるだけのお飾り、責任は会社が背負ってくれるらしい。万年課長の位置から動けなかった平沢さんがかわいそうだ。

部長の名前は猪頭辰之助<sup>いのがしらたつのすけ</sup>。今どきにしてはなんともいかつく古風な名前である。さっきの情報によると年齢は私の一個上で三十三歳。彼は仕事よりも、職場の仲間と仲良くすることに重点を置いており、新入社員には人気だが、年寄達には人気が無い。かくいう私も彼が嫌いだ。

彼が年齢を偽っていたことについては、推測でしかないが心当たりがある。

それは、私が彼に敬語を使うのをやめないからだった。

「部長、お話があります」

いつもは無表情、年より共からは嫁に行けないぞとけなされる仏頂面が今、阿修羅に顔を変え、部長のデスクを強く叩く。

「な、何い？ 怖いな花さん、リラックス……」

ひきつった笑顔が気持ち悪い。体はプロレスラーのように鍛えているのに、中身がなよなよしている。きつと甘やかされて育ったの

だと、今の私は彼をとことん心の中でけなす。

「部長の方が一つ年上と聞きましたか」

「な、何かの聞き間違いじゃないかな？」

「……申し訳ございません。無駄話は今後控えるように致します。

それでは、まだ仕事如山積しているので、失礼します」

怒気に満ちた顔で、部長にそう吐き捨てる。彼はばつの悪そうな顔で笑っている。

久しぶりに怒ってしまった理由は簡単だった。彼が異様に渡しに構ってくるのだ。つまり、他の人間とはコミュニケーションすらとらないから、大した衝突も起きなかったのだが、自分に対して一定以上の好意を寄せて接してきた人間の行為が、人をだますようなものであったことに、悲しみ二割怒り八割の様相を呈していたのだ。

深いため息をもらし、実際午前中にはほぼ終わらせてしまった仕事の見直しと、今後の資料の作成にとりかかろうとしたとき、携帯が鳴った。

「そんな季節か……」

美術大学卒業で、私は一般企業に就職した。つまり、芸術の才能は残念がらなかったといわけだ。

未だに教授とはかわりがあるし、理論や歴史について、後輩に教えられる部分もあるので、たまに学校にお邪魔している。今回のメールは、夏個展のお知らせだった。

中間発表や、新作発表、そしてチャリティーを兼ねた個展である。……それと、同じ会社じゃなかったかな？　うちの生徒がそっちに就職したと思うんだが」

最後に名前もかかれていて、本人に了承を得たのか気になった。

「佐藤孝幸……うちの部署じゃないな」

まだ昼休みは少しあった。私は他の部署へと、佐藤孝幸を探しに行った。

世界は狭いとは言うけれども、本当に見つかるとは思わなかった。しかも、運命の相手である。

私の場合彼は、恋人とかそういう目線の相手ではない。私がこの前街で見かけた真正正銘のゲイなのである。

いままでコミックや小説などでしか見たことが無い世界が、いざ目の前に現実としてあらわれると、得も言われぬ興奮を覚える。しかし、私はそれを上手く顔に出せないのです、やはりいつもの仏頂面である。

私が誘うと彼は、ふたつ返事で了承してくれた。

何かしらのハプニングを期待しながら、私は先ほどの怒りを忘れていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6588s/>

---

マイノリティ達の昼下がり

2011年5月27日21時25分発行